



Title	阿蘇市長目塚古墳出土行方不明土器の発見とその意義 ：朝鮮半島系土器の存在
Author(s)	杉井, 健
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 339-356
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105052
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

阿蘇市長目塚古墳出土行方不明土器の発見とその意義

—朝鮮半島系土器の存在—

杉 井 健

はじめに

熊本県阿蘇市に所在する長目塚古墳は、阿蘇カルデラ北半部の阿蘇谷に営まれた中通古墳群の主墳をなす墳長 111.5 m の前方後円墳である（坂本 1962）。墳丘出土の円筒埴輪や壺形埴輪、須恵器、土師器、そして前方部石室出土遺物の検討から、その築造時期は前方後円墳集成編年（以下では集成編年と記述）の 6 期後半から 7 期初頭と推測される（杉井編 2014）。当墳は、当該時期の熊本県地域では最大規模の前方後円墳である。

長目塚古墳は前方部を東に向ける。その前方部を東にまわりこむようにして北流していた東岳川の流路を直線的に付け替えることが計画され、その工事によって前方部が削平されることになったため、1949 年 12 月から翌 1950 年 8 月にかけて、発掘調査および周辺遺跡の調査が実施された。この発掘調査にかんする報告は 1962 年に発行された『熊本県文化財調査報告』第 3 集のなかの第 1 章にまとめられた（坂本 1962、以下 1962 報告と記述）。

調査後、長目塚古墳出土遺物の多くは阿蘇神社の宝物として管理され、一部の埴輪は熊本県教育委員会に保管されていた。それらすべてを借用し再整理した成果をまとめたのは 2014 年であったが（杉井編 2014、以下 2014 報告と記述）、そのとき 1962 報告に示された遺物のいくつかが行方不明になっていることに気付いた。なかでも、1962 報告で須恵器として図示された 10 点中 8 点もが行方不明であったことは、その割合の高さゆえ強く私の心に刻まれた。

2023 年度の後学期、熊本県高森町上の園古墳群（今村 1979）出土として高森町含蔵寺に所蔵されていた土器を借用し、熊本大学考古学実習用の教材として使用した。その整理作業の過程で、行方不明であった長目塚古墳出土土器 5 点^{かみ}_{その}がそのなかに混入していること、さらに 5 点のほとんどは朝鮮半島系土器であることが明らかとなった。このことについては、当時の学部 3 年生、池上愛菜によって詳細に検討、報告がなされた（池上 2024a～c、以下 2024 報告と記述）。ただし、報告書発行までの時間が限られていたこともあって、阿蘇神社所蔵資料との接合関係の検討や、遺物の混入が生じた原因の解明などは今後の課題として残された。

2024 年 3 月下旬、報告書に掲載した実測図（池上 2024a・b）の一部に不足する箇所があったことから、あらためて混入土器 5 点の実測を行うとともに、4 月下旬、阿蘇神社の協力を得

て、上の園古墳群出土として含藏寺に所蔵されていた長目塚古墳出土土器5点と阿蘇神社所蔵土器との接合関係の検討を行った。その結果、1点のみであったが、接合関係にある個体を見出した。また、5月中旬、阿蘇神社権禰宜、池浦秀隆からの教示を受け、阿蘇神社『社務日誌』のなかに、遺物の混入時期・場所を推測させる記載があることを確認した。

そこで、本稿では、新たに作成した実測図を示しながら、確認された長目塚古墳出土行方不明土器5点の特徴をあらためて説明し、それらが長目塚古墳に存在する意義を考えてみたい。なお、紙幅の関係から、阿蘇神社『社務日誌』の記載内容やそれから推測される混入時期・場所などについての検討は別稿において果たすことにしたい（杉井 2025 予定）。

1. 1962 報告で須恵器として報告された土器の所在確認状況

まず、1962 報告で須恵器として報告された土器 10 点の所在確認状況を整理しておこう。

図 1 は、1962 報告で図示された土器と 2014 報告および 2024 報告で所在が確認された土器を対比的に示したものである。

2014 報告では、木村龍生によって、甕の口縁部（1962 報告：第 29 図 8）と高坏形器台の脚部（同第 30 図 2）の 2 点が確認されたが、残り 8 点は所在不明であることが示された。このとき、所在不明の 1962 報告第 29 図 6 はその特徴から甕の口縁部と、また第 30 図 1 は器台の脚部と判断され、いずれも上下逆転して図示されていることが指摘された（木村 2014）。

2024 報告では、上述のように、含藏寺所蔵品のなかに長目塚古墳出土行方不明土器が混入していたことが明らかにされた（池上 2024c）。それは、高坏脚部 2 点（1962 報告：第 29 図 4・5）、甕 1 点（同 9）、中凹みつまみ付き蓋 1 点（同 10）、宝珠形つまみ付き蓋 1 点（同 7）の計 5 点である。これらのうち宝珠形つまみ付き蓋は、1962 報告では須恵器の項目のなかで説明されていたが、硬質ではなく低火度焼成のやや軟質の土器である。

以上の結果、1962 報告で須恵器として報告された土器のうち、いまだ行方がわからないのは上述の上下逆転して図示された甕の口縁部（第 29 図 6）と器台の脚部（第 30 図 1）、そしてごく低い脚台を有す円盤状の個体（第 29 図 11）の計 3 点である。これらのうち 3 つ目の円盤状の個体は、その器種を明確に思い描くことができない特異な器形である。

2. 阿蘇神社所蔵土器と含藏寺所蔵土器の接合関係の確認

阿蘇神社には、1962 報告で示されたもの以外にも多数の長目塚古墳出土土器片が所蔵されている。2014 報告では、それらすべてについて検討を加え、実測可能なものは図示し、実測できなかったものも可能な限り図版写真のなかで紹介した（杉井編 2014）。上述したように、

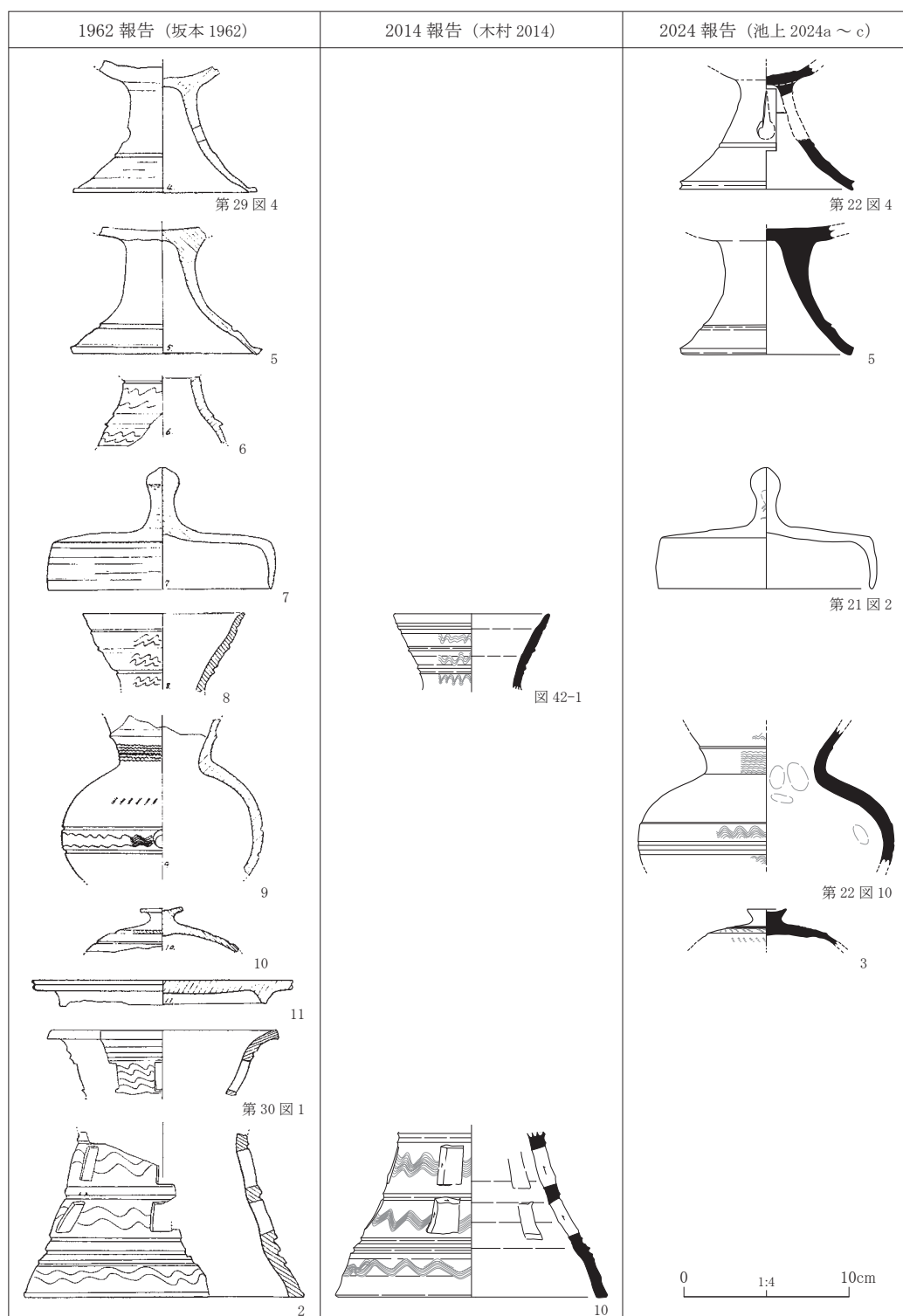
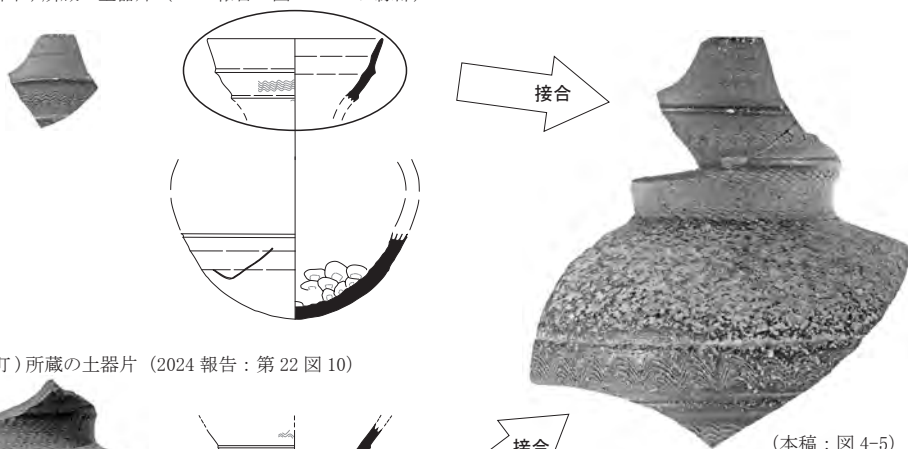


図 1 1962 報告で須恵器と報告された土器の 2014 報告および 2024 報告での所在確認状況

阿蘇神社（阿蘇市）所蔵の土器片（2014 報告：図 42-7 の口縁部）



含蔵寺（高森町）所蔵の土器片（2024 報告：第 22 図 10）

（本稿：図 4-5）

図 2 阿蘇神社所蔵土器片と含蔵寺所蔵土器片の接合関係

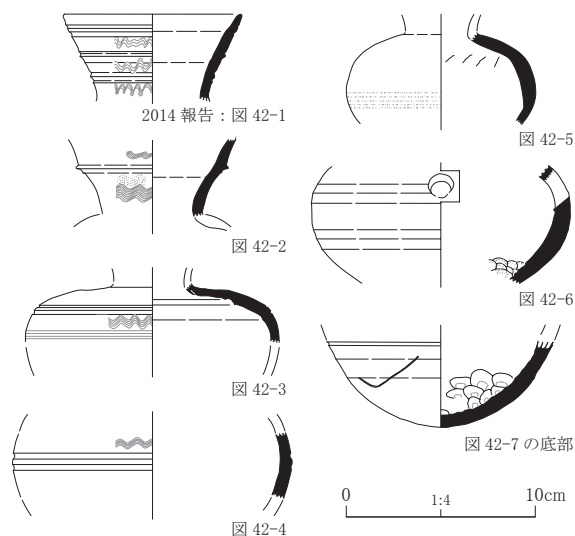


図 3 長目塚古墳出土須恵器甕の 2 種

そうした阿蘇神社所蔵土器片のなかに、含蔵寺所蔵品中に見出した長目塚古墳出土土器片と接合するものが 1 点存在することを確認した。

図 2 はその接合関係を示したものである。阿蘇神社所蔵土器片中の甕口縁部片（2014 報告：図 42-7 の口縁部）と含蔵寺所蔵土器片中に見出した甕頸部～胴部片（2024 報告：第 22 図 10）が接合したのである。この事実により、含蔵寺所蔵土器片のなかに長目塚古墳出土土器片が混入していることが確実となり、また、接合関係を見出せなかつ

たほかの 4 点についても長目塚古墳出土土器であるとするものの確実性がより高まったといえる。

ところで、2014 報告では、図 2 に引用したように、今回含蔵寺所蔵土器片との接合関係が判明した甕口縁部片とは直接接合しないけれど同一個体と推測した底部片が存在し、それらの

中軸線をつないだかたちで実測図を提示していた。しかし、その樋口縁部片が別の頸部～胴部片と接合することが確認されたことから、2014 報告で同一個体とした底部片（2014 報告：図 42－7 の底部）は別個体であり、提示した実測図は誤りであることが明らかとなった。これを受け、あらためて阿蘇神社所蔵の樋片を検討したところ、2014 報告の図 42－7 の底部と図 42－6 に示された個体の底部付近の特徴がよく類似していることを確認した（図 3）。これらは同一個体の可能性がある。また、長目塚古墳出土の樋には、波状文が施される個体（図 3 左列）と文様をもたない個体（同右列）の 2 種類が存在する可能性を指摘できる。

3. 発見した長目塚古墳出土行方不明土器の特徴とその評価

さて、含蔵寺所蔵土器のなかに混入していた長目塚古墳出土行方不明土器 5 点の新たに作成した実測図を図 4 に示す。同じ土器について 2024 報告のなかで池上愛菜が詳細な説明を行っているが（池上 2024a・b）、以下では池上が触れなかった点や新たに明らかとなった点、そしてこれら土器の評価に主眼を置いた記述を行うこととする。

宝珠形つまみ付き蓋 図 4－1 は、宝珠形つまみ付き蓋である。1962 報告では須恵器とされたが、須恵質ではない。須恵器や陶質土器に比べて低火度で焼成されていると考えられ、硬度はそれほど高くない。内面の色調は褐灰色からにぶい褐色、破断面はにぶい橙色、外面は全体に黒色処理がなされており黒色を呈す。外面の天井部から口縁部は、ていねいなナデおよびミガキによってきわめて平滑に仕上げられている。つまみの整形は指押さえによる。平坦で水平な天井部から口縁部が垂直に下がる器形が特徴的である。外面の天井部と口縁部の境界は明瞭な稜をなす。つまみ部に対応する天井部内面の中央がなめらかにくぼんでいる。

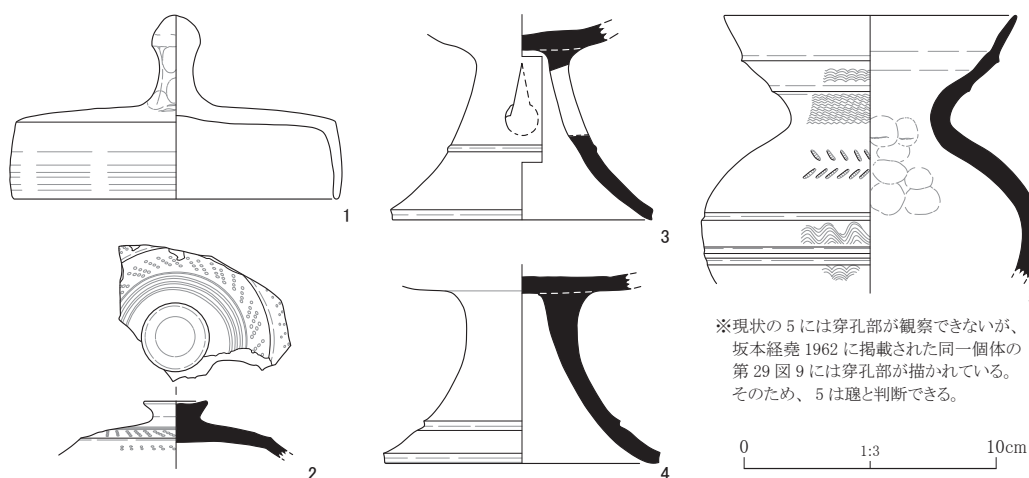


図 4 含蔵寺所蔵土器に混入していた長目塚古墳出土行方不明土器実測図

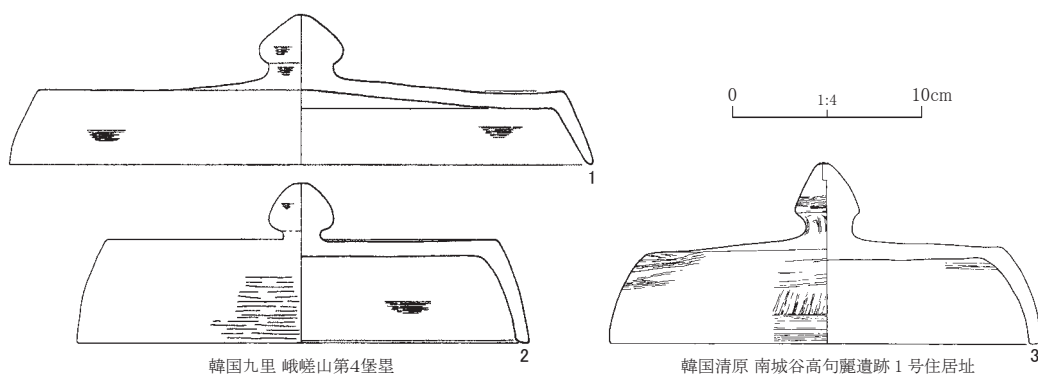


図5 高句麗土器にみられる宝珠形つまみ付き蓋の一例

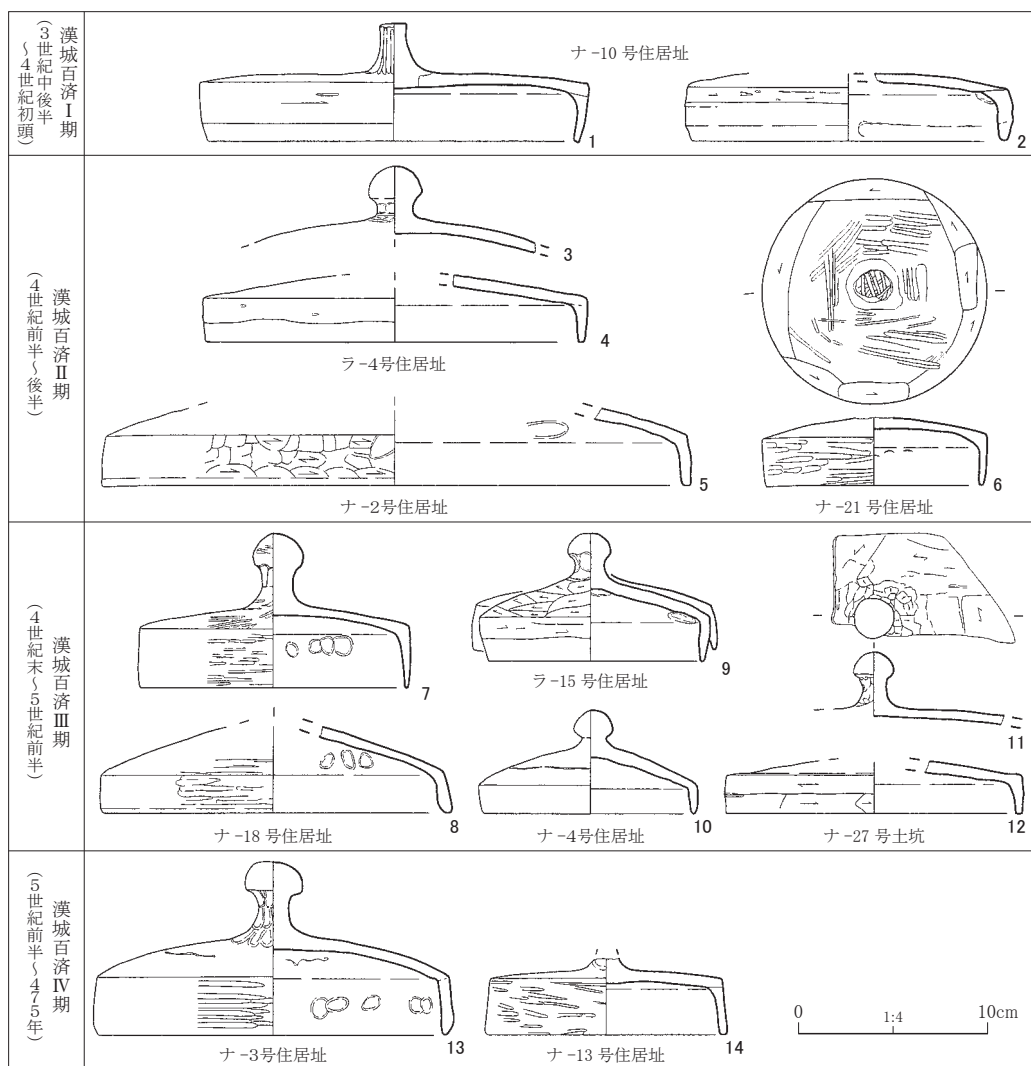


図6 韓国ソウル 風納土城 風納洞 197番地調査区出土宝珠形つまみ付き蓋の諸例

さて、2024 報告では、これが日本列島にはみられない器形をなすことから朝鮮半島に類例を求め、土田純子による編年図（土田 2017：図 179）を参考にして、漢城期の百済土器と推測した。しかし、土田の図に示されたつまみ付き蓋の天井部が水平なものではなかったことから、まだ検討の余地が残されていると考えていた。そこで、白井克也に教を請うなどして、高句麗土器にみられる水平な天井部の宝珠形つまみ付き蓋（図 5）も視野に入れてあらためて類例を調査した。その結果、韓国ソウル風納土城出土の百済土器のなかに酷似するものが存在することに気付いた。それを含めて、風納洞 197 番地調査区出土の宝珠形つまみ付き蓋のうち天井部が水平に近いものを、報告書（이성준編 2013）で示された出土遺構の時期的位置付けにしたがって並べると図 6 のようになる。

図 6 のうち、漢城百済Ⅲ期（4 世紀末～5 世紀前半）とされるナー 18 号住居址出土の 7 は、長目塚古墳出土品よりもひとまわり大きい、水平な天井部から口縁部が垂直に下がる器形およびつまみの形状がきわめてよく似ている。同時期のラー 15 号住居址出土の 9 やナー 27 号土坑出土の 11 など、天井部内面中央のなめらかにくぼむ様子が類似している。これに対し、高句麗土器の蓋（図 5）は、天井部から口縁部の形状は類似するものの、『高句麗土器』に示された事例（정태은・김보람・김홍준編 2016：図面 98～101）を含めても、長目塚古墳出土品のような縦に長く宝珠部分が丸いつまみはほとんど見当たらない。こうした点から、当該土器は、2024 報告で推測されたように、漢城期の百済土器であると判断する。

中凹みつまみ付き蓋 図 4-2 は、中凹みつまみ付き蓋である。焼成は硬質である。つまみの上面がわずかにくぼむ。外面のつまみ部に近い位置に 4 条の櫛描沈線がめぐり、その外側には

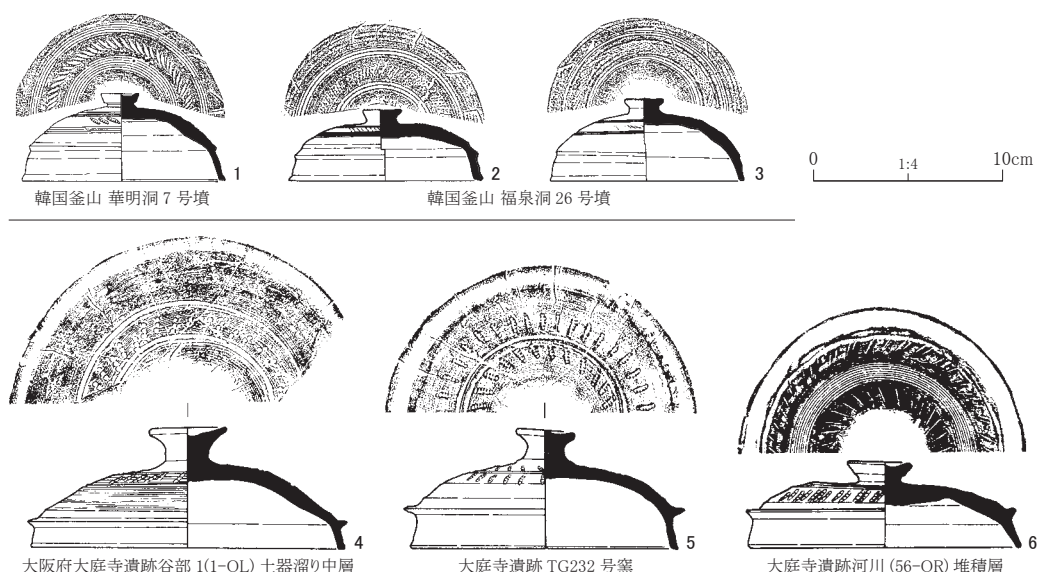


図 7 櫛描列点文を有す中凹みつまみ付き蓋の諸例

右下がりの4点一組の櫛描列点文が、さらに低い突線をはさんでその外側にも同様の櫛描列点文が施されている。内面に灰かぶりが認められる。

さて、この種の蓋は、図7に示したように、陶質土器にもまた初期須恵器にもみられる。しかし、次に述べる確実に陶質土器と判断できる高坏脚部2点の存在や、それらの焼成や色調の様子と類似している点を重視すれば、当該土器も陶質土器と判断してよいと考える。図7には、つまみの形状や文様構成が類似するものとして、韓国釜山華明洞7号墳や同福泉洞26号墳出土の事例をあげたが、この種の蓋は金官加耶圏を中心に分布している。なお、朴升圭（2010・2022）は華明洞7号墳、福泉洞26号墳とも氏の加耶土器編年Ⅴ段階（5世紀第1四半期）に、申敬澈（2000・2009）は氏のⅥ段階（5世紀第1四半期）に位置付けている。

火焰形透孔を有す高坏 図4-3は、火焰形透孔を有す高坏脚部である。脚部外面の中位やや下方に丸みを帯びた突線が1条めぐり、それより上位に火焰形透孔が穿たれている。現状で2つの透孔が残るが、円周長との比較から透孔は3方向に穿たれていたと推測できる。透孔の頂部は坏部下面にほぼ接する位置にまで達している。脚部は、上位から下位まで器厚をあまり減ずることなく、素直な曲線を描いてハの字状に開いている。脚下端部は、下方に尖ったり折れ曲がったりせず、脚部上・中位からの自然なカーブのまま収束する。脚端面はわずかな凹面をなす。端面の上辺は丸みを帯びるが、下辺は鋭く尖っている。端面の下辺が接地する。

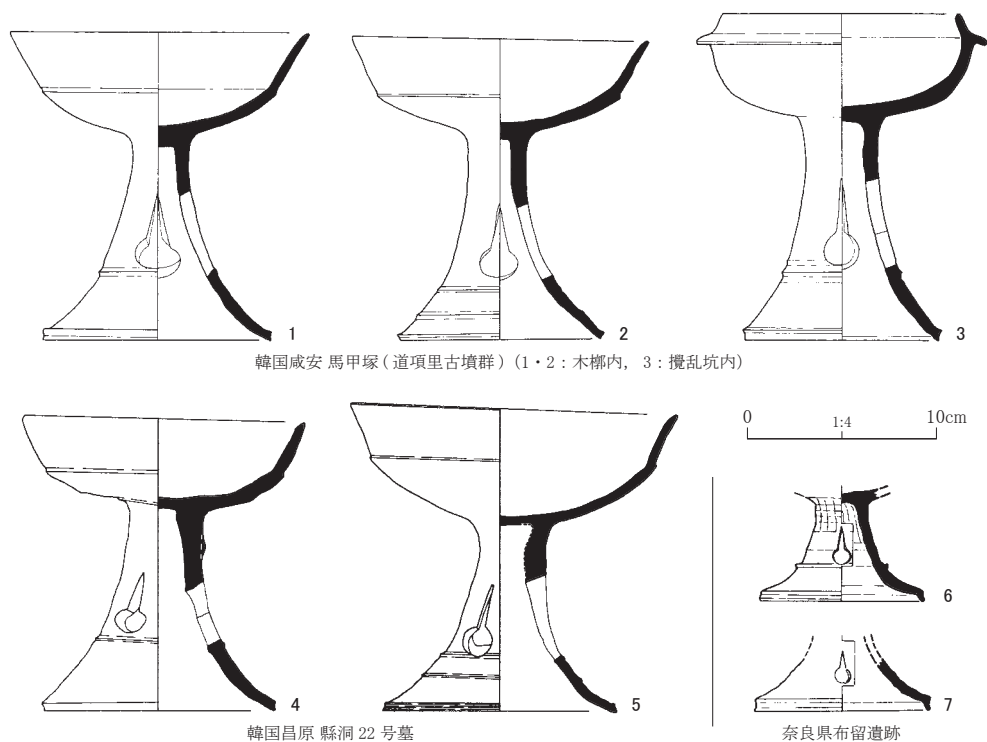


図8 火焰形透孔を有す高坏の諸例

2024 報告でも詳細に検討されたように、火焰形透孔は朝鮮半島阿羅加耶圈の土器に顕著にみられる特徴であることから（竹谷 1985・2003、李柱憲 2002）、当該土器は陶質土器と判断できる。図 8 には、阿羅加耶圈出土の火焰形透孔を有す高杯のうち、脚下半部が脚部上・中位からのカーブに沿って自然に収束するもの、かつ脚下半部に突線をめぐらせるものを選んで図示した。韓国咸安馬甲塚出土の 1～3 のうち、3 は破片資料のため不明だが、1・2 は透孔が 3 方向に穿たれている。韓国昌原縣洞 22 号墓出土の 4・5 も、3 方向の穿孔である。なお、馬甲塚は、報告書ではそのⅢ段階 1 期（5 世紀第 3 四半期）の早い時期（이주헌ほか 2002a : p. 88）、朴升圭（2010・2022）の位置付けでは氏のⅥ段階（5 世紀第 2 四半期）とされている。縣洞 22 号墓は、報告書ではそのⅣ期（4 世紀末から 5 世紀初）に位置付けられている（李盛周・金亨坤 1990 : pp. 262-276 ~ 2）。

脚下半部に凹線が 1 条めぐる透孔を有さない高杯 図 4－4 は、脚下半部に凹線が 1 条めぐる透孔を有さない高杯脚部である。凹線の上辺は鋭く尖り突線のようにになっている。脚部の器厚は、杯部との接点から中位にかけては厚みを減じるが、中位から下位はほぼ一定である。上述の火焰形透孔を有す高杯脚部と同様、脚部は自然な曲線を描いて下端部にまで達し、脚下半部

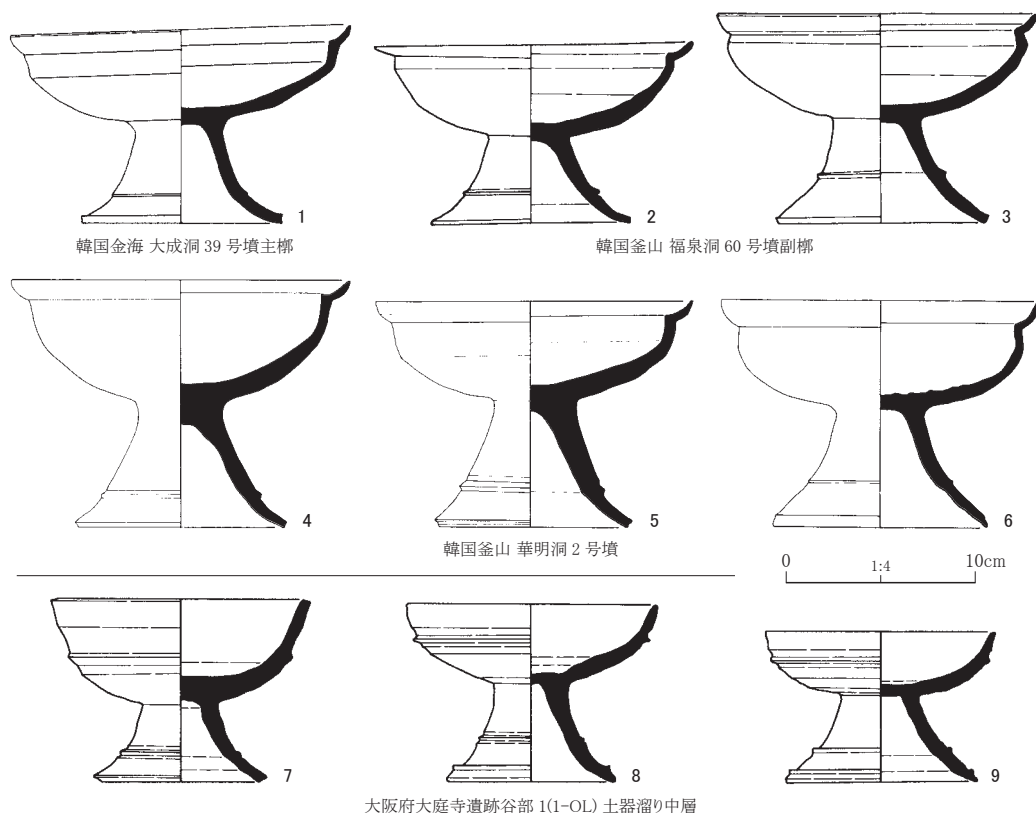


図 9 脚下半部に凹線あるいは突線が 1 条めぐる透孔を有さない高杯の諸例

に特別な造作はなされない。脚端面はわずかにくぼむがほぼ平坦で、その上辺は稜をなすのに対し、下辺は丸く収められている。接地するのは、端面下辺ではなくやや内面側である。

さて、当該土器の類例を探すと、金官加耶圏を中心に分布する外折口縁高坏をあげることができる。したがって、これも陶質土器と判断する。図9にいくつかの事例を示したが、なかでも韓国金海大成洞39号墳主槨出土の1や同釜山福泉洞60号墳副槨出土の2・3は酷似する。ほかに同釜山華明洞2号墳出土の4～6も似ているが、4は脚部上方が中実となっている点で、5は脚部の器厚が下方へ向けて徐々に減じている点で、6は脚下端部が下方に尖っている点で若干異なっている。なお、朴升圭(2010・2022)は、大成洞39号墳と福泉洞60号墳副槨を氏のIV段階(4世紀第4四半期)に、また華明洞2号墳をV段階(5世紀第1四半期)に位置付けている。申敬澈(2000・2009)による年代的位置付けもほぼこれと同様である。

ところで、図9には、初期須恵器にみられる脚部に透孔を有さない高坏もいくつか示した。脚下端部上面に突線をめぐらせたり端部を丸く収めたりするものが多いが(8・9)、大阪府大庭寺遺跡谷部1土器溜り中層出土の7の脚部は、比較的当該土器に近い形状である。

有2突線口縁の甕 図4-5は、甕である。現状の破片に穿孔部はみられないが、同一個体と判断できる1962報告掲載土器の実測図(図1左列:坂本1962の第29図9)には穿孔部が描かれているから、これが甕であることは確実である。上述したように、当該土器は、高森町含藏寺所蔵の頸部～胴部片と阿蘇市阿蘇神社所蔵の口縁部片が接合したものである。

この甕の器形における最大の特徴は、外上方へのびる口縁部に2条の突線がめぐることである。中久保辰夫は、この種の口縁部を「有2突線口縁」と呼んだ(中久保2017:p.97)。口縁部では、その2条の突線間と下位突線の下方の2箇所、山部と谷部の間隔が短い細かな櫛描波状文が施されている。胴部では、その最大径付近の上位に1条、下位に2条の凹線がめぐり、1962報告の実測図によれば、上位と下位の凹線のあいだに穿孔がなされているようである。この上位と下位の凹線間、および下位凹線の下方には、口縁部のものよりも山部と谷部の間隔が長い櫛描波状文が施されている。肩部には、柁目板小口の押圧による櫛描列点文が上下2列に並べて施されている。上側は右下がり、下側は右上がりに行われていて、右向きの綾杉文様となっている。2024報告の実測図では、この櫛描列点文を表していなかった。

さて、当該甕の類例調査においては、中久保辰夫から多くの教示を受けた。朝鮮半島の事例については、主として『유공소호(有孔小壺)』(国立光州博ほか編2011)を参考にした。図10に示したのは、そうして集めた当該甕に関連する土器である。これをみると、中久保に教えられたとおり、大阪府濁り池窯跡出土の甕(1)が、櫛描列点文は施されないものの、当該甕にきわめてよく似ていることが明らかである。これも中久保の教示をもとにするが、肩部に櫛描列点文を施す甕は大阪府ON231号窯に類例がある(3・4)。いずれも初現期の須恵器であることから、長目塚古墳出土の当該甕も初期須恵器であると判断できよう。中久保によれば、

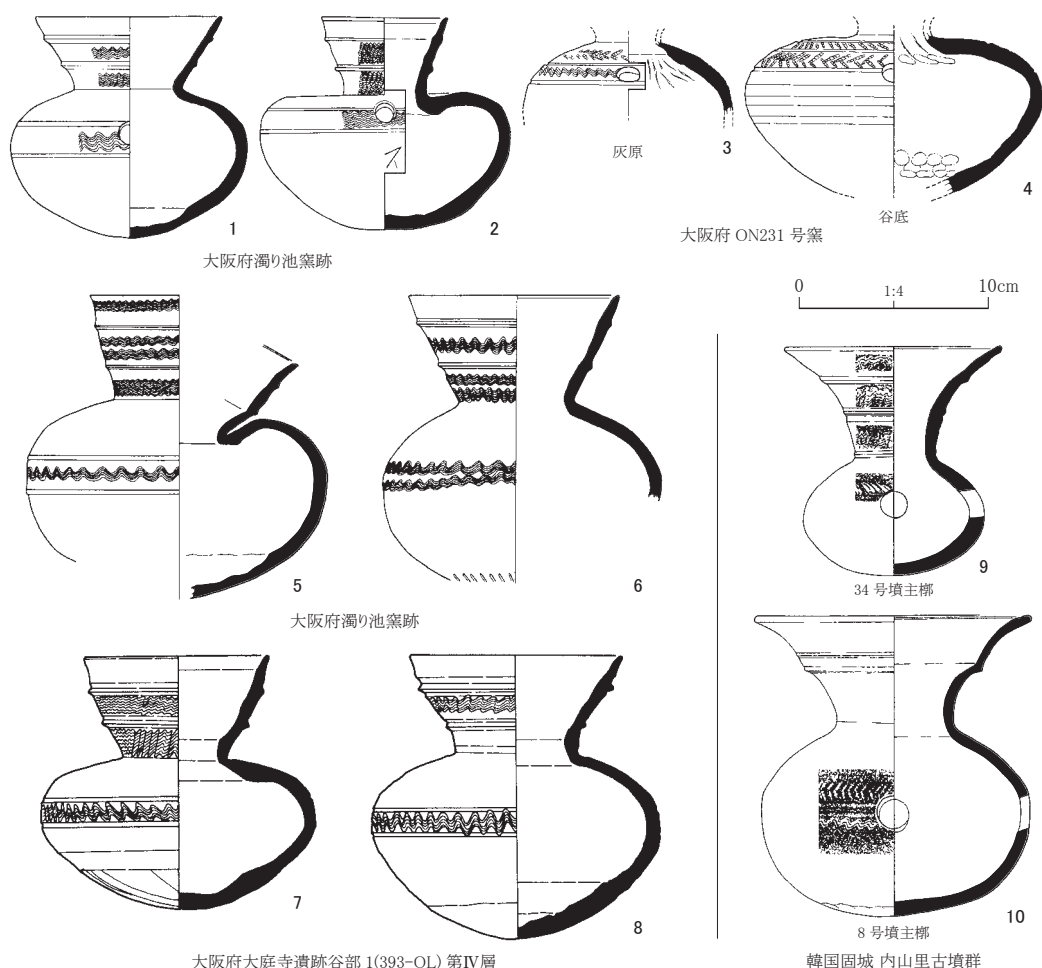


図 10 有 2 突線口縁の甕・壺および肩部に櫛描列点文が施される甕の諸例

有 2 突線口縁は通常、広口壺に採用されるものであるから（5～8）、当該甕は須恵器生産開始期の試行錯誤の過程で生み出された製品である可能性が高い。ところで、朝鮮半島の事例では、小加耶圈の韓国固城内山里 34 号墳主槨出土の甕（9）が、有 2 突線口縁および肩部の櫛描列点文という要素をあわせもつ点でもっとも近いものとして指摘できるが、器形全体の姿はまったく異なっている。なお、朴升圭（2010・2022）は、内山里 34 号墳を氏のⅩ段階（6 世紀第 2 四半期）、8 号墳をⅨ段階（6 世紀第 1 四半期）に位置付けている。

4. 長目塚古墳前方部石室被葬者の性別と年齢

土器の出土状況 今回発見した長目塚古墳出土行方不明土器 5 点の存在意義を考えるうえで、その出土状況は重要な意味をもつ。1962 報告によれば、「土器片は全面に散布するものでなく

前方部前端より北斜面にかけて数群となって埋められている。埋める以前に故意に割った土器である」(坂本 1962 : p. 8) とされる。このことから、1962 報告で示された土器は、長目塚古墳の前方部埋葬にともなう祭祀行為に関わるものである可能性が高いと推測される。

長目塚古墳前方部の埋葬施設は石棺系石室(以下、前方部石室と記述)で、1949～1950年に発掘調査された。その構造や出土遺物の詳細は1962報告と2014報告を参照していただくとして、ここではその被葬者について確認しておきたい。

前方部石室の被葬者 前方部石室からは人歯8本が検出された。それが鑑定され、年齢は咬耗度が中程度であることなどから「左程老齢とは思われない」とされた(栃原 1962:p. 36)。また、性別は、歯冠の「計測値を現代日本人と比較」して、8本中「三本はハッキリ小さく一見女性である」、そのうち1本は「女性的の円みがあつて女性であることは確実と言つてよい」とされた。以上の結果、「出土したこの八本の歯が一鉢分であれば本検体は推定年令三十五才位の女性であろう」と結論づけられた(同 : p. 37)。

古墳被葬者の性別は、古墳時代の社会・政治構造を考える際にはつねに意識されることである。そのため、後円部の中心埋葬でないとはいえ、長目塚古墳前方部石室の被葬者が女性であるとされることについてはこれまでも関心を寄せていた。しかし、人体の形質に疎い私には、歯冠寸法による性別判定の的確性の程度を判断することは難しく、これまでこの鑑定結果を積極的に引用することはしなかった。しかし、前方部埋葬に関連すると思われる土器の意味を考察するうえでは、その被葬者の性格を考慮しないわけにはいかない。

そのため、熊本大学医学部の福田孝一教授を通じて佐賀大学医学部の川久保善智助教から教示を受け、さらにその教示を頼りにいくつかの文献(田中 1961、埴原・小泉 1979、真鍋ほか 1996、岡崎 2005、White & Folkens 2005)に当たった。それらによれば、歯冠寸法をもとにした場合でも、80%を超える高確率での性別判定が可能であるとのことである。

そこで今後は鑑定結果にしたがい、長目塚古墳前方部石室の被葬者は推定年齢35歳くらいの女性であることを前提に考察することにした。

なお、緒方徹は、阿蘇神社『社務日誌』を調査し、移築された石室に出土人歯が再埋葬されたという記述を見出している(緒方 2014 : p. 95)。人歯を再鑑定することはかなわない。

5. 長目塚古墳に朝鮮半島系土器が存在することの意義

図11は、今回発見した長目塚古墳出土行方不明土器5点によく類似する土器の分布を示したものである。発見した5点の土器の故地を表したものといってもよい。長目塚古墳前方部石室の女性被葬者のもとには、近畿中央政権膝下の須恵器窯からだけではなく、朝鮮半島の加耶諸地域、さらには漢城期百済からの土器ももたらされているのである。では、なぜ、こうした



図 11 発見した長目塚古墳出土行方不明土器に類似する土器の分布

多種の朝鮮半島系土器が長目塚古墳にもたらされたのだろうか。

考えられる可能性はいくつかあるが、大きくは次の2つではないだろうか。1つは、のちに前方部石室に葬られることになる人物が近畿中央政権へ出仕した際に入手した可能性、もう1つは、朝鮮半島諸地域との直接交渉によって入手した可能性である。

前者の場合であれば、前方部石室の被葬者は、近畿中央政権においてかなり深く外交に携わり、しかもそのみではなく、前方部石室の副葬品には多くの鉄鏃や鉄刀が含まれているから、軍事にも関わっていた可能性が想定される。一方、後者の場合であれば、熊本県地域と朝鮮半島諸地域とのあいだに独自の交渉ルートが存在した可能性が想定されよう。

ここで、熊本県地域全体に目を向ければ、熊本市南区塚原古墳群第15号方形周溝墓出土の有蓋高坏（野田ほか1975）（図12-1）や宇城市松橋大塚古墳出土のコンパス文が施された器台（神川2015）（同2）が注

目される。前者は加耶地域に故地が求められる陶質土器と推測され、後者は報告書では日本列島産の初期須恵器とされているが陶質土器と判断される余地も残されているように思う。いずれも、長目塚古墳と同時期、古墳時代中期中葉でも早い時期に位置付けられる土器である。注目すべきなのは、前者の土器が

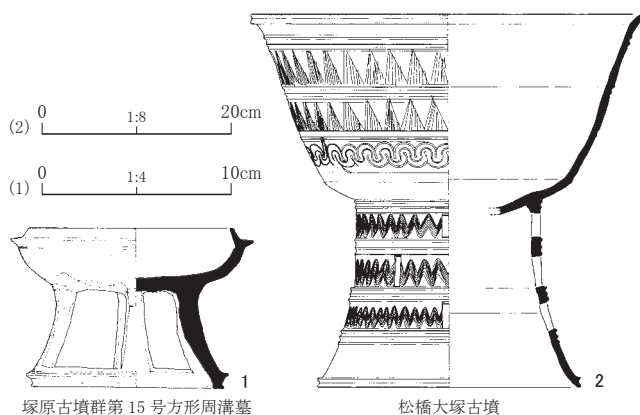


図 12 長目塚古墳と同時期の熊本県地域出土朝鮮半島系土器

出土したのは古墳の階層ではそれほど上位にない方形周溝墓である点で、このことは特別有力な首長層のもとにだけ朝鮮半島系土器が集まっていたわけではないことを示唆している。つまり、当該時期の熊本県地域には、朝鮮半島に系譜をもつ土器がもたらされるような独自の道筋が開かれていた可能性が考えられるのである。

こうした熊本県地域の特性を考慮すれば、長目塚古墳前方部出土の朝鮮半島系土器も、有明海沿岸あるいは八代海沿岸の首長たちを通じた朝鮮半島諸地域との直接交渉の結果もたらされた可能性を考えてもよいのではないだろうか。

ところで、熊本県地域における古墳の築造動向をみると（杉井 2022）、集成編年 4 期後半から 6 期前半までのあいだは有力な前方後円墳が築造されない。ところが、集成編年 6 期後半から 7 期初頭の頃、それまで小規模な石棺墓程度しか築かれていなかった阿蘇谷に、突如といってもよいかたちで、墳長 100 m を超える前方後円墳の長目塚古墳が築造されるのである（杉井 2024b）。しかも、それは当該時期の熊本県地域ではほかに並ぶものがない規模を誇る。そして、集成編年 7 期以降になると、有明海側では合志川中流域に高熊古墳が、菊池川下流域に江田船山古墳を含む清原古墳群が営まれ、また八代海側では松橋大塚古墳が築造される。つまり、古墳時代中期中葉以降、有明海側と八代海側にふたたび有力な前方後円墳が築かれるようになるのだが、阿蘇谷における長目塚古墳の築造はその先駆けとなる出来事なのである。

こうした熊本県地域全体の古墳築造動向、さらに熊本県地域の首長が朝鮮半島諸地域との直接交渉ルートを確認していた可能性や阿蘇谷が九州島の東西南北をつなぐルートの結節点である点を考慮すれば、長目塚古墳の築造は、阿蘇谷の首長単独ではなく、有明海沿岸地域や八代海沿岸地域の首長も協同して行われた可能性を想定してもよいのではないか。地域の首長にとっては情報や文物が行き交うルートの掌握はきわめて重要な政治課題の 1 つであったと推測するが、阿蘇谷はそれを象徴するような場所なのである。そうした場所であったからこそ、先進の技術・文化が朝鮮半島から多く渡来しはじめた 5 世紀前葉、交易ルートの安定を共通目標とした首長たちに阿蘇谷の地が大型前方後円墳築造地として選ばれたのではないだろうか。

おわりに

これまで、阿蘇地域では古墳時代の朝鮮半島系渡来文物の存在は知られていなかった。今回の発見はその状況を大きく変えるものとなった。さらに、火焰形透孔を有す高坏は九州島では初例であり、また管見によるかぎり、日本列島での漢城期百済の宝珠形つまみ付き蓋の類例を知らない。75 年前に長目塚古墳で出土し、長らく行方不明であった土器のなかに、地域の歴史を書き換えるような資料が含まれていたのである。今回の発見は、かつての調査資料を正しく保管することの重要性、そして新たな視点で再整理することの重要性を教えている。

長目塚古墳の後円部埋葬の様相はまったく不明である。それを承知のうえで、本稿では、発見された土器の多くが朝鮮半島に故地をもつことを足がかりとして、交易ルートの安定した掌握という視点のもとに、阿蘇谷に長目塚古墳が築造された理由を大胆に推測してみた。それが正鵠を射ているのかどうかについては今後のさらなる検討に委ねたいが、長目塚古墳の築造意義は日本列島をみているだけではとらえきれないことだけは確かなようである。

謝 辞

本稿の作成において、次の方々からご教示、ご高配をたまわった。記して謝意を表したい。

池浦秀隆（阿蘇神社）、本田裕樹（含蔵寺）、井鍋誉之（高森町教育委員会）、中久保辰夫（京都橘大学）、白井克也（九州国立博物館）、清家章（岡山大学）、福田孝一（熊本大学）、川久保善智（佐賀大学）

引用・参考文献

【日文】

- 池上愛菜 2024a「蓋」『考古学研究室報告』第59集 熊本大学文学部考古学研究室、熊本：p. 44
- 池上愛菜 2024b「須恵器」同上：pp. 44-50
- 池上愛菜 2024c「阿蘇市長目塚古墳前方部出土土器の混入」同上：pp. 50-53（以上3点、熊本大学学術リポジトリからダウンロード可能：<http://hdl.handle.net/2298/0002000449>）
- 今村俊男 1979「上世」『高森町史』高森町、熊本：pp. 67-114
- 岡崎健治 2005「歯冠サイズに基づく未成人骨の性判定一性差の集団間変異の検討と出土人骨への応用一」『Anthropological Science (Japanese Series)』113巻2号 日本人類学会、東京：pp. 139-159
- 緒方 徹 2014「阿蘇神社所蔵資料にみる長目塚古墳発掘調査の舞台裏」『長目塚古墳の研究一有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究一』2010年度～2013年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書 熊本大学文学部、熊本：pp. 91-97（熊本大学学術リポジトリからダウンロード可能：<http://hdl.handle.net/2298/30143>）
- 岡戸哲紀（編）1995『陶邑・大庭寺遺跡』IV（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第90輯 大阪府教育委員会・（財）大阪府埋蔵文化財協会、大阪
- 岡戸哲紀（編）1996『陶邑・大庭寺遺跡』V（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第10集 大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター、大阪
- 神川めぐみ 2015『松橋大塚古墳』宇城市文化財調査報告書第5集 宇城市教育委員会、熊本
- 木村龍生 2014「須恵器」『長目塚古墳の研究一有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究一』2010年度～2013年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書 熊本大学文学部、熊本：pp. 56-63（熊本大学学術リポジトリからダウンロード可能：<http://hdl.handle.net/2298/30142>）
- 酒井清治 2013『土器から見た古墳時代の日韓交流』同成社、東京

- 坂本経堯 1962「阿蘇長目塚 附 小嵐山古墳」『熊本県文化財調査報告』第3集 熊本県教育委員会、熊本：pp. 1-40
- 定森秀夫 2015『朝鮮三国時代陶質土器の研究』六一書房、東京
- 白井克也 1992「ソウル・夢村土城出土土器編年試案—いわゆる百濟前期都城論に関連して—」『東京大学考古学研究室研究紀要』東京大学文学部考古学研究室、東京：pp. 49-80
- 白井克也 1998「博多出土高句麗土器と7世紀の北部九州—筑紫大宰・筑紫遷宮と対外交渉—」『考古学雑誌』第83巻第4号 日本考古学会、東京：pp. 80-107
- 申敬澈 1983「伽倻地域における4世紀代の陶質土器と墓制—金海礼安里遺跡の発掘調査を中心として—」『古代伽倻の検討』古代を考える34 古代を考える会、大阪
- 申敬澈（田中由理／訳）2009「韓国考古資料からみた日本古墳時代年代論の問題点」『日韓における古墳・三国時代の年代観』Ⅲ 国立釜山大学校博物館・国立歴史民俗博物館、福岡：pp. 141-162
- 杉井 健（編）2014『長目塚古墳の研究—有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究—』2010年度～2013年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書 熊本大学文学部、熊本（熊本大学学術リポジトリからダウンロード可能：<http://hdl.handle.net/2298/30141>, 30142）
- 杉井 健 2022『先史・原史天草の文化と古墳』上天草市史姫戸町・龍ヶ岳町編2 原始・古代 上天草市、熊本
- 杉井 健 2024a「上の園古墳群の概要と今回の報告に至る経緯」『考古学研究室報告』第59集 熊本大学文学部考古学研究室、熊本：pp. 40-43（熊本大学学術リポジトリからダウンロード可能：<http://hdl.handle.net/2298/0002000449>）
- 杉井 健 2024b「阿蘇谷における古墳築造系譜試論」『九州前方後円墳研究会論集—九州前方後円墳研究会25回大会記念・柳澤一男さん喜寿記念・宇野慎敏さん古稀記念—』九州前方後円墳研究会、鹿児島：pp. 67-76
- 杉井 健 2025 予定「阿蘇市長目塚古墳出土土器が高森町上の園古墳群出土土器に混入した原因および熊本大学保管の長目塚古墳出土壺形埴輪の検討」『先史学・考古学論究』IX 小畑弘己先生退任記念・考古学研究室創設50周年記念 龍田考古会、熊本：pp. 177-189
- 竹谷俊夫 1983『布留遺跡出土の初期須恵器と韓式系土師器』考古学調査研究中間報告8 埋蔵文化財天理教調査団、奈良
- 竹谷俊夫 1985「初期須恵器の系譜に関する一考察—火焰形透孔をもつ陶器を中心に—」『天理大学学報』第145輯 天理大学学術研究会、奈良：pp. 64-80
- 竹谷俊夫 2003「日本における火焰形透孔土器の系譜について」『天理参考館報』第16号 天理大学出版部、奈良：pp. 23-41
- 田中晟策 1961「計測による人の歯列（顎模型）の性別判定法」『口腔病学会雑誌』第28巻第1号 口腔病学会、東京：pp. 14-19
- 田中英夫 1999『濁り池須恵器窯跡』信太山遺跡調査団濁り池窯跡班、大阪
- 土田純子 2017『東アジアと百濟土器』同成社、東京

- 枡原義人 1962「長目塚古墳前方部堅穴石室の人歯に就いて」『熊本県文化財調査報告』第3集 熊本県教育委員会、熊本：pp. 33-38
- 中久保辰夫 2017『日本古代国家の形成過程と対外交流』大阪大学出版会、大阪
- 西口陽一（編）1994『野々井西遺跡・ON231号窯跡』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第86輯 大阪府教育委員会・（財）大阪府埋蔵文化財協会、大阪
- 野田拓治ほか 1975『塚原』熊本県文化財調査報告第16集 熊本県教育委員会、熊本
- 埴原和郎・小泉清隆 1979「歯冠近遠心径に基づく性別の判定—判別関数法による—」『人類学雑誌』第87巻第4号 日本人類学会、東京：pp. 445-456
- 朴升圭（高久健二／訳）2016「加耶と倭の4～6世紀における陶質土器と須恵器」『日韓4～5世紀の土器・鉄器生産と集落』日韓交渉の考古学—古墳時代—研究会、福岡：pp. 127-161
- 真鍋義孝・北川賀一・小山田常一・六反田篤 1996「永久歯・歯冠の大きさによる性別判定の可能性について—台湾ヤミ族における評価—」『歯科基礎医学会雑誌』第38巻第1号 歯科基礎医学会、東京：pp. 7-13
- 李柱憲（竹谷俊夫／訳）2002「火焰形透窓土器の新視角」『天理参考館報』第15号 天理大学附属天理参考館、奈良：pp. 123-143
- 【韓文】
- 国立光州博物館・（財）大韓文化遺産研究センター（編）2011『유공소호（有孔小壺）』진인진、韓国果川
- 김두철ほか 2013『福泉洞古墳群』Ⅴ 釜山大学校博物館研究叢書第38輯 釜山大学校博物館、韓国釜山
- 金延鶴・鄭澄元 1979『釜山華明洞古墳群』釜山大学校博物館遺跡調査報告第2輯 釜山大学校博物館、韓国釜山
- 朴升圭 2010『加耶土器 様式 研究』東義大学校大学院博士学位論文、韓国釜山
- 박승규 2022『가야토기 연구（加耶土器 研究）』가야문화연구원 학술연구총서 01 서경문화사、韓国ソウル
- 박중익ほか 2005『固城 内山里古墳群』Ⅱ 學術調査報告第30輯 国立昌原文化財研究所、韓国昌原
- 申敬澈 2000「金官加耶 土器의編年—洛東江下流域 前期陶質土器의편년—」『伽耶考古學論叢』3 駕洛國史蹟開發研究院、韓国ソウル：pp. 5-46
- 申敬澈・金宰佑 2000『金海大成洞古墳群』Ⅰ 慶星大学校博物館研究叢書第4輯 慶星大学校博物館、韓国釜山
- 李盛周・金亨坤 1990『馬山 縣洞遺蹟』昌原大学博物館學術調査報告第3冊 昌原大学博物館、韓国昌原
- 이성준（編）2013『風納土城』XⅤ 国立文化財研究所、韓国大田
- 李在賢ほか 1996『東萊福泉洞古墳群』Ⅲ 釜山大学校博物館研究叢書第19輯 釜山大学校博物館、韓国釜山

- 이주헌ほか 2002a 『咸安 馬甲塚』 學術調査報告第 15 輯 国立昌原文化財研究所、韓国昌原
- 이주헌ほか 2002b 『固城 内山里古墳群』 I 學術調査報告第 18 輯 国立昌原文化財研究所、韓国昌原
- 이형호 2014 『南韓地域 出土 高句麗土器 研究』 高麗大学校大学院碩士學位論文、韓国ソウル
- 정태은・김보람・김홍수(編) 2016 『高句麗의土器』 国立文化財研究所、韓国大田
- 차용길・박중균ほか 2004 『清原 南城谷 高句麗遺蹟』 調査報告第 104 冊 忠北大学校博物館、韓国清州
- 최명식(編) 2012 『風納土城』 XⅢ 国立文化財研究所、韓国大田
- 최종택ほか 2000 『아차산 제 4 보루－말굴조사 종합보고서－』 ソウル大学校博物館、韓国ソウル

【英文】

White, Tim D. and Folkens, Pieter A. 2005. *The Human Bone Manual*. Elsevier Academic Press. Oxford, UK

挿図出典

- 図 1：左列．坂本 1962 の第 29・30 図 中央列．木村 2014 (杉井編 2014) の図 42 右列．池上 2024a の第 21 図・池上 2024b の第 22 図
- 図 2：木村 2014 (杉井編 2014) の図 42、池上 2024b の第 22 図、写真は杉井撮影
- 図 3：木村 2014 (杉井編 2014) の図 42
- 図 4：杉井実測・製図
- 図 5：1・2. 최종택ほか 2000 の図面 80 3. 차용길・박중균ほか 2004 の図面 44
- 図 6：1・2・5～8・10～14. 최명식編 2012 の遺物図面 7・12・16・22・35・44・46・80 3・4・9. 이성준編 2013 の遺物図面 20・40
- 図 7：1～3. 申敬澈 1983 の挿図 8 (報告書掲載図より拓本が鮮明であるためこれを使用) 4・5. 岡戸編 1995 の第 30・73 図 6. 岡戸編 1996 の第 149 図
- 図 8：1～3. 이주헌ほか 2002a の図面 6 4・5. 李盛周・金亨坤 1990 の図 37 6・7. 竹谷 1983 の挿図 4
- 図 9：1. 申敬澈・金宰佑 2000 の図面 43 2・3. 李在賢ほか 1996 の図面 36 4～6. 金延鶴・鄭澄元 1979 の挿図 6 7～9. 岡戸編 1995 の第 31 図
- 図 10：1・2・5・6. 田中 1999 の図版 9・60 3・4. 西口編 1994 の図 4・10 7・8. 岡戸編 1996 の第 42 図 9. 박종익ほか 2005 の図面 12 10. 이주헌ほか 2002b の図面 15
- 図 11：杉井作成、土器図の出典は図 6～10 と同じ
- 図 12：1. 野田ほか 1975 資料編の図版 119 2. 神川 2015 の図 11